

白選五十首



花山多佳子

はなやま・たかこ 1948年、東京都生まれ。同志社大学在学中「塔短歌会」入会。現在「塔短歌会」選者。歌集に『樹の下の椅子』、『楕円の実』、『砂鉄の光』、『草舟』（ながらみ現代短歌賞）、『空合』（河野愛子賞）、『春疾風』、選集『おいらん草』、『現代短歌文庫・花山多佳子歌集』がある。

夕映えはとおくに兆し水たまるふちに桜花のこびりつきたり

透明なかつむりのようにうずくまり聴くいにしえの種子のひびきを

鉄条網のくい入る道を髪柔くなりてひたすら帰りくるなり

しかたなく洗面器に水をはりている今日もむごたらしき青天なれば

爆薬がわが手にあらば真昼この都市は静けく来たらんわれに

リチャード三世のふりして寄れる父の掌が肩を把みぬ顔を歪めて

さまざまにはばたける音充つるらしこの伸びやかな角を曲がれば

夢のなか硝子の破片拾いゆくしだいに大きくまぶしくなりぬ

一日の主題のごとき夕映えのなかあたふたと物を煮ており

抽出しはみな少しずつ開あいている真昼の部屋に入る蔓の先

子を抱きて穴より出でし縄文の人のごとくにあたりまぶしき

『樹の下の椅子』

『楕円の実』

第二歌集の『楕円の実』の後半から子供の歌が多くなった。第一歌集の『樹の下の椅子』の若いころの気分からすると、これは予期せぬ成り行きだった。人生わからないものだなあと思う。取り上げられる歌がどうも子供の歌に偏るので、せめて白選では他の歌を並べようと思うのだが、やはり、かなり入ってしまった。実際にはほかの歌だって多いのだけだ。

自分では、特に子供を中心に作歌しているという意識はない。日常身の対象のひとつとして入ってきているにすぎない。でも生き物だし、どんどん変わるし、こちらにも影響を与えるものだから面白くて、ついつい多くなる。そうこうしているうちに、二人の子が

子守唄うたい終わりに立ちしとき一生は半ば過ぎしと思いき

ひとふさの葡萄を食みて子のまなこ午睡ののちのひかりともり来

動物の絵本見ていし子がふいにわが髪分けて「耳」をさがしぬ

神がかりのようなおみな子の物言いに動かされつつ遊ぶおとうと

取りつく樹定めし鳥が空中に羽根の力を抜くかたち見ゆ

他の子よりわが子らしきかは疑問なれど幼稚園の門に受け取る一人

「砂鉄の光」

あかかくも物の如くに犀は立ち疾走の衝動を踏んでいるのか

〈何かが化けてお母さんになっている〉という感じたまさか吾子の胸よぎるらし

黒板に迷子のわが子の名を書きて又先へ行く夢の廊下を

左右のふくらみ違なう南瓜をみておれば地に在りしまま実なれるかたちか

いたく大事にしている棒の先折れて男の子はかじるその折れ口を

ペランダにひょうたんつくれと子は言いぬそに子を入れて閉めたき吾は

小国の祈りのごとく花閉じて黄のかたばみの朝のしずけさ

「草舟」

起きぬ子に「どこにいるの」と呼ばわれれば「ここよ　ここよ」と唇くち動きたり

どなり合いて一日過ぐれど夕ぐれを家族歩みぬさるすべりの花

ペランダより家出せし子が一ミリの泥を裸足につけて戻り来

電柱のコンクリートを擦りながら裏より出づるエノコログサは

スカートスカートの足らぬ丈より長く伸ぶる脚は今しも弟を蹴る

黒胡麻の一つ浮きたる牛乳というもの見たり夜のテーブルに

日曜あしたの朝の夢に少女なるわれは野球のボールに衝つたれき

二十歳を過ぎた。

小さいうちはいいのだが、大きくなると微妙である。幸い、息子のほうは私の歌集を読んではない。読んだら絶対にキレるだろうと思うと戦々恐々だ。歌になったものは、むろんモデルとイコールではない。違ちがうんだよ、これは歌なんだよ、と言ったところで納得しないだろう。こんなふうに見てたんだね、あんたは、と、かなりまずい局面になりそうなのだ。娘だつて決して機嫌は良くない。やはり書くほうというのは、一方的な加害者なのである。今回、そのへんも多少考慮して選んだつもりである。

第五歌集の「空合」から、それまでの新仮名遣いから、旧仮名遣いに改めた。そのときの「後書き」に、「つくるときは感覚はかなり違うものだ」と気づいた。旧仮名にしてから以前なら、こうはつくらなかつたという向きに行くことも多い。それがいいのか、わるいのかは、まだ判然としない。」と書いたのだが、確かに歌が違ちがつてきたような気がする。

ただ、去年出版した「春疾風」は、以前にくらべて口語調がかなりまじつてきた。なぜだろう。文語、旧仮名を土台とした安心感からかもしれないし、同時に警戒心であるかもしれない。言葉とはふしぎなものだ。勝手に動いていく。

誰かうしろになみだぐみつつ佇つごとし夕ぐれが桜のいろになるころ

【空合】

かの人も現実うつつに在りて暑き空押し分けて来る葉書一枚

ビデオこわれ洗面台割れ冷蔵庫奇怪にわめき夏休み終る

制服のカラーに顎を押し上げてまだ乳歯ある子の出でゆきぬ

あとずさりあとずさりして満月を冬の櫛くしの梢つがひより離す

いさかひの声よりさびし弟と姉の口笛とほくに揃ふ

ブリクラのシールになつて落ちてゐるむすめを見たり風吹く畳に

青蚊帳いぬに寝し夜思へばそのかみの夏はさまざまな匂ひしてをりき

深みあるいろと思ひて朝床に腕の打ち身のあとを見てをり

うぐひすのこゑききながら筍は竹にならむと細りゆくかも

生き別れせし子がどこかにゐるやうに日傘をさして陸橋わたる

なかぞらを羽根ひきしぼり墜ちゆくを愉しみてまた羽根をひろげて

青嵐ふく夕まぐれ路地の口より鮫のあたまが出かかつてゐる

いつの間に塗りしか真青なテーブルが出現したり息子の部屋に

強く言へばこのごろは息子が退ひくことに気づきたりああ時は流れる

「ココアでも飲む？」といふ声聞こえて夜を明かすらし姉と弟

針のないホチキスが紙を噛むやうな返事をしては話なられてゐる

流しの下の扉あければゆつくりとずり落ちてくる夜の鍋

振り返り見れば夜道にわがむすめ携帯電話に凭りかかるやう

【春疾風】